

きさもと
笹本しずかさん(右)

学校教育学部
芸術系コース(美術)3年

平成3(1991)年三木市生まれ。県立三木高校から22(2010)年に入学。制作のゼミでは主に水彩の抽象画、論文のゼミでは絵本の研究に取り組んでいる。

はらだみほ
原田美穂さん(左)

学校教育学部
芸術系コース(美術)3年

平成3(1991)年岡山県生まれ。岡山明誠学院高校時代に小学校の図工教育に興味を持ち、22(2010)年に入学。図工の授業研究の傍ら、制作のゼミで彫塑を学んでいる。



今年1月に加東市が発行した「かとう手作り文庫」の表紙と裏表紙の絵も2人が手掛けた

キラリな人
SHINY PERSON

“デビュー作”の
完成を機に
展覧会にも
挑戦したいです

昨年10月、神戸市北区にある重症心身障害児施設「ここにこハウス医療福祉センター」の渡り廊下に8面の陶板壁画が設置された。ヒマワリ畑でウサギやリスに囲まれてほほ笑む女の子、犬や鳥と一緒に紅葉を眺める男の子…。柔らかなタッチの絵は見る人の心を和ませる。

「春夏秋冬の六甲」をテーマに、30センチ角の陶板93枚を使って描かれた「子どもと動物のふれあい」。笹本しずかさんが原画を手掛け、友人の原田美穂さんは美術コースの仲間たちと絵付けをした。

「親しみやすい絵柄を心掛けました。人物と動物の大きさのバランスに悩みました」

笹本さんがゼミ担当の大西久准教授を介して依頼されたのは昨年5月。水彩の抽象画を得意とするため慣れないイラスト風のタッチに苦戦したそうで、下絵ができるまでにおよそ2カ月を要した。

夏休みに始まった陶板の絵付けには延べ30人弱の学生が参加し、原田さんは最多の12枚を担当。原画の拡大コピーを陶板に貼ってトレースし、釉薬で着色した。「焼成後に色ムラが出ないよう、塗膜の厚さを均等にするのが難しかったです。でも、こつさえつかめば後は夢中になっていました」と振り返る。

図工の授業研究がしたくて兵教大を選んだ原田さんは、「決められた箇所に決められた色を塗る」作業から、授業実践のヒントを得たという。

「実習先の子どもたちに、私が描いた線画に絵の具を塗らせました。はみ出さずにきちんと塗る子もいれば、枠の中に模様を描く子もいたり、制約がある中でも子どもたちの個性は出るんですね」

また、「誰かに見せるために絵を描いたことがない」という笹本さんにとって、陶板壁画は初めて人目に触れる作品となった。「技術の上達のためにも、身近な展覧会から応募してみました」という意欲が湧いてきました。

「例えば、原田さんも『学内の作品展にしか出品したことがないので、積極的に外に向けて発信していきたいです』と力強く語った。」